

グローバル化と国際規格



工学博士 服部 修 次
福井大学大学院工学研究科 教授

2012年度には機械工学科長として、学科の外部評価とJABEE（日本技術者教育認定機構）の受審に取組んだ。外部評価は、学外の有識者4名により学科及び大学院専攻の組織、教育活動、研究活動、社会貢献の4つの分野について7年ぶりに評価を受けた。いまさら「JABEE」の受審との声もあったが、本学の中期目標、中期計画の中でグローバル社会に通用する教育研究活動を掲げており、この中で「グローバル社会に通用する」の評価部分は、どうするのかが問題であった。

JABEEは、大学等の高等機関で実施されている技術者を育成する教育プログラムが社会の要求水準を満たしているかを国際的な同等性を持つ認定基準に基づいて認定作業を行っている第三者機関である。JABEEが示している教育目標は、①地球的視点、②技術者倫理、③数学、自然科学、情報科学の能力、④専門技術に関する知識、⑤社会の要求を解決するためのデザイン能力、⑥論理的な記述力、コミュニケーション能力、⑦自主的、継続的学習能力、⑧制約条件下での計画的な仕事遂行能力の合計8つの知識、能力を網羅したプログラムで独自の学習・教育目標を設定する必要がある。本学科では2004年に「JABEE認証を目指した教育プログラム」を作成し、このプログラムに沿った教育を8年間行ってきており、この蓄積に対して2012年11月にJABEEを受審することにした。この結果、教育のPDCAサイクルのCheck部分が弱いこと、学科での教育改善活動を評価するための学部や大学のシステムがないことなどの指摘を受けた。このように、グローバル社会に通用するためには、国際的な機関による定期的な評価を受ける必要がある。

ところで、私の大学のある福井県は、全国シェアが90%以上である眼鏡フレームの生産が有名である。福井県眼鏡フレームの生産は、大阪から伝わったもので、冬場に雪で農作業ができない農家の副業として発展したものである。眼鏡のISO規格に関する審議は1980年に始まり、その後1年もしくは1年半ごとに開催されている。眼鏡の規格は、用語の制定に始まり、眼鏡フレームの寸法測定方式、表示、玉型板、小ねじ、眼鏡フレームの必要事項と試験法の順に制定されている。商品が国際的に通用するには、ISO規格に適合する必要がある。私は、1981年からISO国際会議に参加し、日本の代表委員としてISO規格作りに参加している。ISO会議には、イギリス、ドイツ、フランス、イタリア、アメリカ合衆国、日本等の各国の委員が参加して、国際規格ISOの原案を1週間にわたって審議する。ISO規格の原案は、各国の国内規格（日本の場合はJIS規格）や議長による原案に基づく。会議の「根回し」は、日本の独自の手法かと思っていたが、会議では審議するよりもむしろ会議前のEメールや会議中のコーヒープレークのときに各国で下打ち合わせが行われ、採決は意外とスムーズに進展する。また、国際会議はたびたび開催できないので、会議最終日に、決議事項の確認が行われ、もし異議があればその場で訂正され、非常に民主的に行われている。ISO規格は、最初に委員会草案（CD）として発議され、その後DIS（Draft International Standard）として審議し、最終的にISO規格となる。最初の審議からISO規格の公布までに約10年間の年月を要する。また、生産の技術レベルが日進月歩に発展しているので、ISO規格は成立後にも5年ごとに見

直すことになっており、規格によっては公布後直ちに見直しに着手しているものもある。国際規格においても、先の組織改革と同様に常にCheck部分が重要であることを示している。また、私の所属している研究会においても日本からの意見を積極的に提案するようにしている。

このように、グローバル社会で通用する組織として存続するためには、積極的に情報発信するとともに、国際的な会議等で情報交換を重ね、各種の機関から定期的な評価を受け、指摘のあった点を真摯に受け止め、時代に即すように常に改善に取り組むことが重要であるように思われる。

